



(左下：横倉山、右中：田鶴山城址)

## 柴尾の一本杉

『石庭』で有名な京都・龍安寺〔ユネスコの世界遺産〕の初代住職である義天玄詔が若い頃修行したという「天忠寺」のあった越知町柴尾集落の南入口の道路分岐点付近に、昔から地元の人々が“観音の一本杉”と親しんできた大杉がある。小さな観音堂の横にあって、幹周り5.4㍍、樹高23㍍、推定樹齢450年といわれ、「越知町保護有形文化財」（天然記念物）に指定されている。1962年9月16日の指定からすでに50年が経過しているので、推定樹齢は500年ということになり、樹高も何メートルかは高くなっているはずである。

この大杉の根本には、『宝永七年庚寅 南無弘法大師遍照金剛』と刻まれた砂岩製の石碑〔たて約1㍍、よこ約50㍍〕が建っている。「宝永七年」は西暦1710年で、ここ越知町でも横倉山の南斜面が大規模な崩壊を起こした『宝永南海地震』（宝永四（1707）年）の3年後に当る。従って、この石碑は南海地震で何らかの被害を蒙ったことを記念して建立されたことも考えられる。実際、この石碑は「宝永南海地震による仁淀川中流の天然ダムの災害碑」（宝永南海地震土砂災害記念碑保存会）として扱われている。それによると、宝永南海地震の際、越知町横倉地区で生じた大規模な崩壊による土砂が対岸の舞ヶ鼻地にまで押し流され仁淀川が堰き止められて天然ダムが形成され、それよりも上流域が冠水したと言われている。その時の水位は標高61mほどで、越知盆地には、同じ標高61mの6カ

所に天然ダムの湛水範囲を示した同様の石碑があるようである。そのため、地元では「石碑より下に家を建てるな」という言い伝えが残っているという。保存会では、「湛水位を示す石碑を大切に保存し、言い伝えを含め『貴重な防災教訓』として残したい」としている。

一本杉の辺は標高60m弱で、仁淀川の氾濫の際には度々水田や道路が冠水するという。その為か、お堂の天井の梁には40×50㍍大の大きな石が4個載せられ、お堂が濁流に押し流されないような工夫がなされている。また、これより南にはしばらく人家がなく一面水田で遮るものがなく、西方に聳える横倉山（古名：三嶽山）方向から吹いてくる冷たい風“三嶽おろし”の影響を受ける。一本杉はそのような洪水や風雪に耐え、ずっと越知町の歴史を見つめてきたことになる。また昔のことなら、旅人に木陰を提供していた、絶好の休憩所だったのかもしれない。今も集落の人々の安らぎの場、憩いの場となっているようだ。

この「柴尾の一本杉」は、地元越知町出身の洋画家の企画展：『第70回野並允温個展 - 平家の里風景画とヒマラヤの山 -』（2012年9月25日～11月23日）でも作品として描かれていたし、この記事の取材中にたまたま一本杉とお堂の精巧な模型を制作した地元越知町の住民とも出逢った。やはり、越知町の人々にとっては、一つの思い出の詰まったシンボリック存在なのだろうか。

これと同じ文句の同様の石碑は、この他越知町の女川（阿弥陀堂）・蚕糸資料館上、佐川町の柳瀬・河内ヶ谷・九反田・永野・加茂本村・加茂広岡・長竹・黒岩の計11カ所で見られ、明らかに標高61mを越す場所にあるものもある。



(横倉山自然の森博物館敷地内)

## ワカキノサクラ

安井 敏夫

牧野富太郎博士が、1890（明治23）年に地元高知県佐川町内の尾川城址の林で発見・命名した山桜の一種。漢名：「稚木の桜」、学名： *Prunus ogawana* Makinoで、種子を蒔いて発芽後3年以内に開花し、樹高も3m程度にしか達しないことから、“ヤマザクラの幼形開花型”とされている。

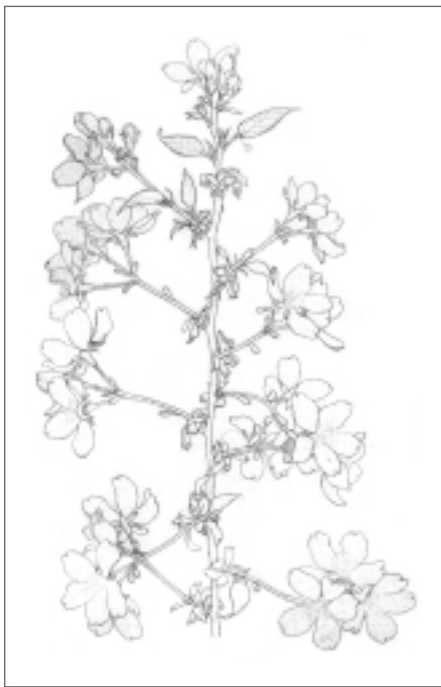
博士は、1936（昭和11）年4月19日の高知市高見山での高知博物学会会員の植物採集指導のために高知に帰省しているが、これに先立ち14日に故郷尾川村（現佐川町尾川）に行き、ワカキノサクラを見分している。

この「ワカキノサクラ」の種子が、2008（平成20）年秋に、「ヒョウタンザクラ」（高知県仁淀川町）とともにスペースシャトル「エンデバー」に搭載されて宇宙に打ち上げられ、地球を4,100周し、259日間（約8ヶ月）の宇宙の旅を終えて地球に帰還した。「ワカキノサクラ」は、平成20年5月に採取した250粒が地球を周り、「ワカキノサクラ」が最初に見つかった地元佐川町の尾川小学校に平成21年9月7日に戻って来た。宇宙を旅した250粒のうち5本が育ち、翌年既に花を咲かせたようである。

今年2012（平成24）年4月24日は、牧野博士の生誕150年に当り、『高知県立牧野植物園』（高知市五台山）では記念行事が行われ、“宇宙桜”の「ワカキノサクラ」と「ヒョウタンザクラ」が各1本ずつ記念植樹された。

“宇宙桜”の計画の主たる目的は、JAXA（宇宙航空研究開発機構）主催の『花伝説』で、スペースシャトルが最後のフ

ライトになるため、全国の植物・花の種子を宇宙に旅させ「子供たちに夢（ロマン）を与える」ということなのである。このうち、サクラの種子は、沖縄から北海道までの13地域の子供たちが集めた名木14種類の中に選ばれ、この中に高知県のワカキノサクラとヒョウタンザクラが入っていた。ワカキノサクラに関して言えば、発芽率が著しく低いので統計的に議論するには無理があるが、今のところ外見上その他に特に目立った変化はないようである。ただ、他の種類の例では、これまで接ぎ木でしか増やせず、発芽しないはずの種子が芽を出したり、通常は1年に50cm程度しか伸びないものが発芽して90cm以上も伸び、中には160cmを超えるものもあるなど、異変が相次いでいるようである。つまり、『宇宙で大量の宇宙線（放射線）を浴びた桜の種子が急成長する』という結果が出たことになるが、その原因として、「宇宙という無重力の強い放射線の環境下で、遺伝子の突然変異や細胞の活性化が起こった」という考え方もあるようだ。また、同じ2008年9月に打ち上げられた中国の有人宇宙船「神舟7号」に搭載された野菜の種子（“宇宙種”）にも変異が起きたようである。



牧野博士によるワカキノサクラのスケッチ画  
『牧野富太郎植物画集』（高知県立牧野植物園）より

すなわち、ナスでは、大きさが異常に大きくなり、色も紫色から白色に変わり、キュウリも実が太くなり、やはり白色に変化したという。中国国内ではすでにこの色違いのナスが市場に出回っており、料理の食材として使用されているそうである。一般に新しい品種の育成には5～8年がかかるのところ、宇宙空間を利用すればはるかに時間が短縮されることになるという。“宇宙桜”の「ワカキノサクラ」や「ヒョウタンザクラ」に今後どのような変化が見られるのか興味深い部分もある。ただ、この場合、宇宙線（放射線）

が種子に突然変異を与えることが主たる原因だとすれば、今、福島原発事故以来、特に心配・問題視されている放射線が人体に与える影響も等閑にはできず、手放しでは喜べないことになる。

ちなみに、「ワカキノサクラ」は、以前は山林内に自生が見られたようであるが、今日では絶滅

してしまって栽培されているものだけが残っている状況だという。突然変異で生じた種は生存期間が短いと一般的には言われており、それが“宿命”であったのかもしれない。

(やすいとしお / 横倉山自然の森博物館 副館長兼学芸員)

## 横倉山の発光キノコ

安井 敏夫

横倉山には、日本唯一ともいわれる「アカガシの原生林」が残っている。幹周りが3mを超すアカガシの巨木を主とし、ウラジログシ、スタジイ、ツブラジイなどのブナ科の古木から成る“原生林”である。横倉山は古来平安時代の昔から土佐国唯一の修験道の霊場で、大部分が神社所有地となっていて、同時に「横倉山県立自然公園」に指定されていることが今日まで自然の状態のまま保たれてきた所以であろう。それ故、横倉山は植物の宝庫で、世界的な植物学者・牧野富太郎が若い頃研究のフィールドとした、博士ゆかりの森でもある。

そんな原生林の中に、シイの巨木の腐朽した倒木に光るキノコが着生しているのを、数年前地元「横倉山自然の森博物館」友の会の行事である『ヒメボタル観察会』の下見に来ていた職員が見つけた。

かさの直径約1㎞、高さ約2㎞の小さなキノコであるが、ほのかな幻想的な青白い光を発していて、「シイノトモシビタケ」(漢名：椎の灯火茸)であることがわかった。シイノトモシビタケは、シイなどの広葉樹の朽ちた幹に発生するキシメジ科・クヌギタケ属に属する発光キノコで、同属の発光キノコとしてはヤコウタケがある。最初1950年に発光生物の研究で有名な羽根田弥太博士によって八丈島(東京都)で発見され、伊豆

諸島・八丈島特産と考えられていたが、その後紀伊半島(和歌山県)や九州(大分県)六甲山などで見つかった。いづれにしても、国内では数カ所ではしか確認されていない大変珍しい発光キノコである。発光キノコは世界で約50種、日本では約10種が確認されており、内7種類が八丈島からのもので、何故か八丈島に圧倒的に多い。「シイノトモシビタケ」は、横倉山では、ちょうどヒメボタルが飛び交う、6月中旬から7月上旬と8月下旬から9月初旬の2回にかけて観ることができる。

この珍しい神秘的な発光キノコの美しさに“取付かれた”のが、清流・仁淀川のこの上なく清らかな神秘的な水の色を“仁淀ブルー”と呼んだ写真家の高橋宣之氏(高知市)である。氏は毎晩のように高知市から車で1時間以上かけて横倉山に通い続け、一人で



シイノトモシビタケ

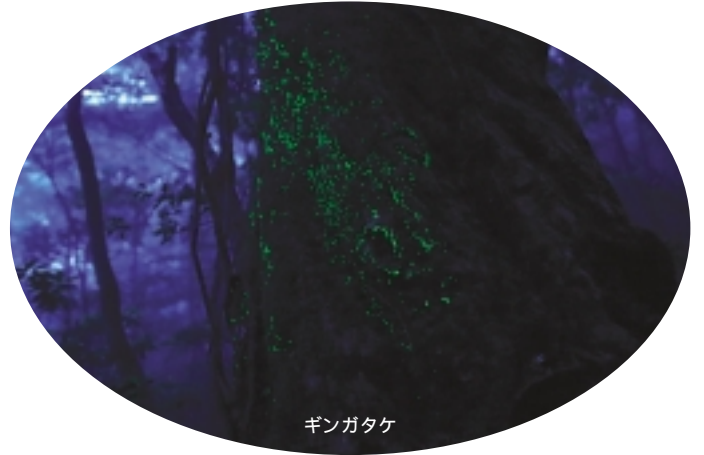
薄暗い不気味な闇の中に入って観察し、実に素晴らしい芸術的な写真を撮ることに成功した。それだけでなく、氏はシイノトモシビタケ以外に、そのすぐ近くに地面が光る場所があるのを見つけることになった。小さな光が落葉の上に無数に散らばり、まるで夜空の星々のように見えることから、大変ロマンチックな“地上の星”と名付けられた。この神秘的な光の正体はしばらく不明であったが、この至近を捜した結果、これ

より少し離れた生きたスダジイの巨木の幹に、シイノトモシビタケよりもはるかに小さな別の発光性キノコが見つかった。

そのうち、NHKが横倉山の夜の“光”をテーマにした番組『光る森 - 神秘の発光を追う - 』を制作することになり、遂にこの正体不明のキノコに科学のメスが入った。国立科学博物館のキノコ専門の研究員が現地を訪れ、幹に着生したキノコと落葉に付着したキノコの菌糸？を採取し、DNA鑑定が行われることになった。結果は意外なものであった。何と、直線距離にして570km以上も隔たった、しかも気候も気象条件も全く異なる八丈島の発光キノコの一つ「ギンガタケ」とDNAがピッタリ一致したのである！ 植物は、

土壌や気候などの条件に微妙に左右される生物なので、生育範囲もある程度狭い範囲に限定される。例えば、地質時代に栄えた日本に關係する化石植物群である「手取植物群」(中生代ジュラ紀後期～白亜紀前期：

西南日本内帯)や高知県南国市領石を模式地とする「領石植物群」(同ジュラ紀後期～白亜紀前期：西南日本外帯)などのように。また、横倉山から産する日本最古の植物化石・リン木〔古生代デボン紀：約3億6500万年前)と全く同種のもの(オーストラリアや南中国(秦嶺山脈以南)からも見



ギンガタケ

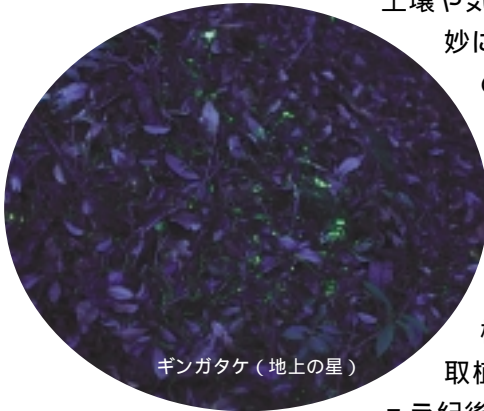
つかることから、これらの大陸がかつて隣接していたこと、さらには、グロッソプテリス(“舌状の葉”の意)と呼ばれる植物を主とする「グロッソプテリス植物群」(古生代ペルム紀)が、アフリカ・インド・南アメリカ・オーストラリア・南極などから産することから、これらの大陸がかつて一つの超大陸「ゴンドワナ大陸」を形成していたことがわかることなどもその例である。そのような理由で、今後八丈島と横倉山の間地域にも「ギンガタケ」が見つかる可能性があるという。結局、横倉山では、シイノトモシビタケ、ギンガタケ、ツキヨタケの3種の発光キノコが見られることになる。

それにしても、八丈島の発光キノコもロマンチックな「ギンガタケ」とは……。やはり、闇夜にほんのりと光る様子は、夜空の星々を連想させるのであろうか？ 横倉山にまた新たな“魅力”が一つ付け加わった。こうして見ると、横倉山とは、何とさまざまな点で底知れない神秘と魅力に溢れた山なのだろう……。

ギンガタケは正式な名前がついていない。八丈島で仮称として呼ばれている名前。

(写真提供：高橋宣之氏)

(やすい としお / 横倉山自然の森博物館 副館長兼学芸員)



ギンガタケ(地上の星)

## 横倉山ミニ歳時記

「トサジョウロウホトトギス」咲く！

越知町内の日頃お世話になっている方から以前博物館にいただいた2鉢の「トサジョウロウホトトギス」が10月に入って早々に美しい可憐な花を咲かせた。幅1.5襤、長さ3.5襤、続いて幅2.0襤、長さ4.3襤の各々一輪ずつである。

「トサジョウロウホトトギス」は、牧野富太郎博士が横倉山で発見・命名した「横倉山タイプ植物」(25種類)の中で、博士が92歳の時の対談で語っているように、横倉山で最も印象に残っている植物のようである。横倉山に自生しているものは、葉の濃い緑色とレモン色の花のコントラストが実に美しく、“昔宮中に仕えた貴婦人”を意味する『上臈(ジョウロウ)』にふさわしい大変上品なユリ科の植物である。

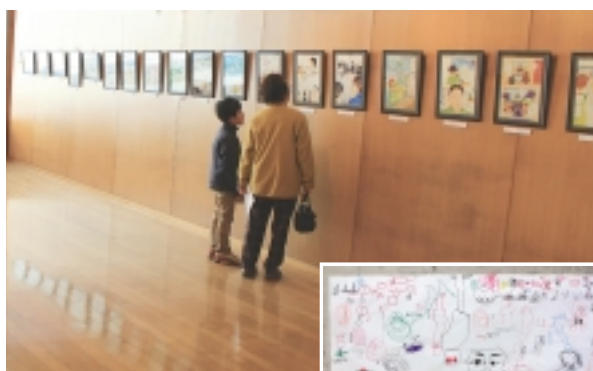
ただ、自生地は険しい断崖で普通の人は容易に近づいて、ゆっくり觀賞することができないのが残念である。かつてはもっと見やすい場所にあったかもしれないが、現在は絶滅危惧種に指定されているため、数は極めて少ない。間違っても博士ゆかりの横倉山のものが絶滅してなくならないように、みんなで見守っていかなくてはならない。



## 博物館ニュース

春季企画展：『まんが甲子園 作品展』

2012年3月3日(土)～4月8日(日)



まんが展来場者イラスト

高知県の貴重な文化の一つである「まんが」の全国コンクール『まんが甲子園』の第1回大会〔平成4(1992)年〕から第20回大会までの歴代の最優秀作品20点と、第20回大会競技作品16点の計36点(レプリカ)を一堂に展示紹介する。

同時に、佐川高校まんが部の協力を得て同校の作品も展示し、部活の記録も紹介する。

「当時の世相がよくわかり、思い出しながら楽しく見せてもらいました」などの感想があった。

企画展：『ゆかいなパロディー木彫展』

4月28日(土)～6月17日(日)

言うとその場がなごみ、時にははらける“おやじギャグ”が一時流行った。そんなゆかいなしゃれの“言葉遊び”をユーモアな木彫で表現したアート展。

この分野では日本唯一の“笑刻家”(彫刻家をもじったもの)・岩崎祐司氏(静岡県焼津市)の手による、ことわ

ざや映画・漫画・昔話などのタイトル、言葉のワンフレーズなどをおもしろ、おかしくもじった“パロディー彫刻”の作品約60点を展示。パロディーと彫刻が合体した“パロディー彫刻”は想像以上に人気があり、「おもしろかった」「楽しかった」という感想が圧倒的で、子どもから大人まで喜んでもらえることができた。その他「久しぶりにお腹の底から笑いました」「思わず笑ってしまうギャグの数々もすばらしいですが、木彫の腕も超一級でした」などの感想もあった。



はなさんか!じじい

リョーマの休日

第34回写真家協会展：『土佐』選抜移動展

6月26日(火)～7月1日(日)

高知県写真家協会の会員が撮影した、県内の伝統芸能や風物詩、風景などを対象とした受賞作品と選抜作品計61点を展示。

移りゆく、また失われつつある高知の風物にカメラを向け、記録として残す、郷土愛に満ちた写真が多く集まった写真展となった。

夏休み企画展：『夏休み限定!デハラユキノリ博物館』

7月14日(土)～9月9日(日)

高知市出身で国内外で活躍し幅広い人気をよんでいるフ

ィギュアイラストレーター・デハラ ユキノリさんの、粘土で作った色々なユーモアで親しみ深いキャラクター作品(新作50体)を展示。同時に、館内の至る所にソフビフィギュア(121体)を設置し、景品付きの「フィギュア探し」を行い、子どもから大人まで館内が大いに賑わった。また、期間中サイン会や本人の直接指導によるワークショップも開催し、デハラさん本人と多くの作品との出会いの場とし、夏休みの思い出としてもらう。

主な感想は、「おもしろかった」「楽しかった」が圧倒的に多く、これまでの企画展中、最多の入場者となった。その他、「また来ました。何度来てもおもしろいです」「フィギュアのキャラクターの個性の強さがすばらしいです」「常設展に何気なく置かれていたフィギュアが魅力的でした。安藤建築にも合っています」「子供たちが博物館中に隠れているフィギュアを見つけるのを楽しんでいました」などがあった。



サトシ君

牧野富太郎博士

## 『デハラユキノリ博物館』関連イベント

公開粘土制作&サイン会(オープニングイベント)

7月14日(土) 12:00~14:00

「粘土で妖怪を作ろう」〔参加型ワークショップ〕

7月16日(月・祝) 10:00~15:00

「自分だけのソフピストラップを作ろう」

〔参加型ワークショップ〕

8月11日(土) 13:00~15:00

「デハラへぼイラスト教室/動物を描こう」

〔参加型ワークショップ〕

9月8日(土) 13:00~15:00

〔各教室 定員20名〕



ストラップ作り

## 夏休み博物館教室〔工作〕

8月26日(土) 9:00~11:30、13:00~15:30

〔講師：橋本 優(リサイクル万華鏡協会); 参加者：午前の部 16名、午後の部 12名〕

今年も例年通り、各自好きな鏡筒に張る張り紙とビーズ玉を選んで「オリジナル万華鏡」を作った。その後、今年初めてのCD盤の穴にビーズ玉をはめ込み回転軸とした“ビーゴマ”作りも行った。

「万華鏡」は、いつも美しく夢のあるものが出来上がるし、“ビーゴマ”も、裏にいろんな色の紋様を描くことにより違った見え方のするものとなる。廃材や身の回りのちょっとしたものから実にいろんな遊具ができるものである。



## 夏休み博物館教室〔化石〕

8月26日(日) 9:00~12:00

〔講師：安井敏夫(横倉山自然の森博物館学芸員); 参加者：12名〕

今年も昨年と同様、中生代三畳紀の代表的な示準化石である「モノチス」〔約2億2000万年前〕の採集を行う。初期型の恐竜が出現し始める頃の海生の二枚貝で、現在のホタテガイの先祖型に当るものである。当時の地球の様子を想像しながら化石を採集でき、ロマンを感じてもらえたのではないだろうか。ただ、このような化石採集を体験できる場所が時とともになくなっていくのは寂しいものである。



## 友の会だより

### 「炭焼体験&お花見昼食会」

2012年4月7日(土)〔参加者：14名(内事務局1名)〕

2月に炭窯に入れた木や野菜・果物などを取り出した後、皆で桜の花を眺めながら昼食会をし、親睦を計った。



### 「“土佐の投入堂”<sup>ひじり</sup> 聖神社とアケボノツツジ観察会」

2012年5月3日(木・祝)〔参加者：会員12名、越知史談会3名、事務局2名〕

越知町南西端にあって、鳥取県の「投入堂」<sup>なげいれどう</sup>〔平安時代：

国宝〕に似た断崖の洞穴に建つ「聖神社」の見学と、このさらに南の稜線付近のアケボノツツジの観察を行う。

地元出身の有志を中心に進められてきた神社参道の整備と岩場の鎖の設置がほぼ終わり、昨年神事も済ませて受け入れ体制ができたため今回の見学となった。建築自体は「投入堂」には到底及ばないが、立地条件はこちらの方がはるかに厳しい。県内はもとより全国的にも大変珍しい神社である。



本地域のアケボノツツジの群生は、県内のそれが1,000mを越す地域に限られることから、800m(大ヲ山眺望所:785m)に満たない低地で見られるのは大変珍しいようである。残念ながら、今年は花の付きが悪く、来年に期待することにした。

「金環日食観察会」

2012年5月21日(月)〔講師:片岡重敦(元横倉山自然の森博物館館長) 参加者:会員15名、一般6名、事務局1名〕

太陽の前を月が通って、太陽をリング状に覆い隠す「金環日食」。高知市では、7:25頃から金環食が始まり7:28頃終わり、約3分間観られた。自然が創造する芸術である。

「仁淀川水質調べ」〔身近な水環境の全国一斉調査〕

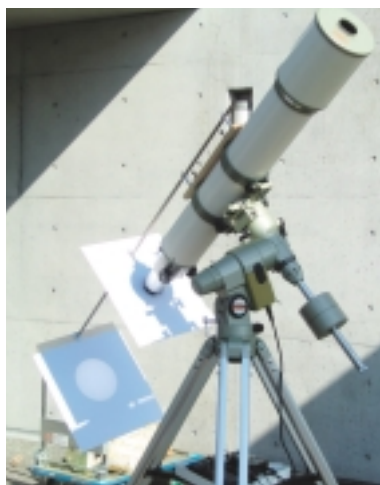
2012年6月2日(土)〔参加者:会員9名、事務局2名〕



越知町内の仁淀川本流、市街地のはずれにある支流・坂折川、市街地内を流れる支流・梅ノ木川の3ヶ所の調査地点で測定する。前二者は、バックテストによるCOD値(化学的酸素要求量)は「0」で、「清流仁淀川」のイメージに合っていた。

一方、梅ノ木川は、コンクリートの三面張りの河床に蛇かごや木炭が敷設されているものの、川幅が狭い上家庭排水が直接流入するため、「8以上」という最も汚染度の高い値を示していた。ただ、定期的に「ふるさと川と山・夢の会」のメンバーと越知小学校の生徒が清掃しており、以前に比べると、夏にはホタルの姿も見えるようになり、確実に環境は改善されているといえる。

「金星の日面通過観察会」



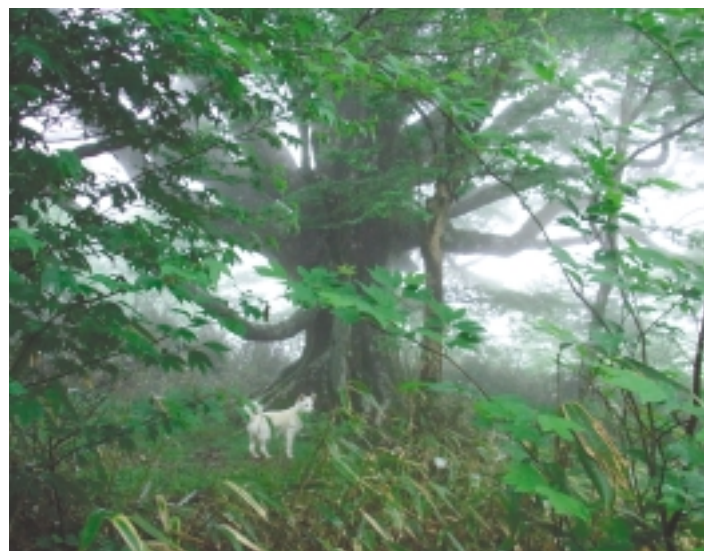
2012年6月6日(水)〔講師:片岡重敦(元横倉山自然の森博物館館長) 参加者:会員8名、一般38名、事務局2名〕

金星が太陽の手前を横切って通過

する「日面通過」。金星の視直径は太陽の約30分の一で、真っ黒い点に過ぎない。次回は何と2117年12月、つまり100年後とのことで、恐らく一生の内に二度と観ることのない天体ショーである。

「大座礼山おおざれやまのブナ林観察」

2012年6月9日(土)〔参加者:会員6名、事務局3名〕



愛媛県と高知県土佐郡大川村の境界にある(標高1587.5m)の山頂付近の尾根筋に、樹齢300~600年のブナの巨木が点在している。根本付近から十数本もの枝が扇状に分かれた見事な枝ぶりの天然木である。かつてはもっとたくさんあってブナの原生林が広がっていたであろうことを思うと少々残念な気がする。やはり、横倉山のアカガシの原生林とは随分と趣が異なる。

「杉原神社のヒメボタル観察会」

2012年7月4日(水)〔参加者:会員10名、一般8名、事務局3名〕

恒例の横倉山山中にある杉原神社(標高660m)付近でヒメボタルを観察する。

その後、アカガシ(?)の朽ちた倒木に生えた発光キノコ・シイノトモシビタケを見る。この連日これの撮影のため訪れている写真家・高橋宜之氏(高知市)の案内で、すぐ近くのシイの木の立木に生えて“夜空の星”のように見える別の発光キノコを見ることができた。

ヒメボタルとシイノトモシビタケ、光るメカニズムは異なるが、それぞれに生きる上でのそれぞれの目的がある。

「スターウォッチング」〔「全国星空継続観察会(環境省)」〕

2012年8月13日(月)〔講師:片岡重敦(元横倉山自然の森博物館館長) 参加者:会員6名、一般1名、事務局1名〕

「肉眼による天の川の観察」「双眼鏡を用いたこと座の観察」を行い、大気環境の状態を調べる。越知町の夜空はいつも、大気汚染、光害もなく澄んだきれいな空だ。

〔博物館日誌(抄)平成24年度博物館行事予定〕

2012年3月3日(土)~4月8日(日)  
 春季企画展:『「まんが甲子園」作品展』  
 4月28日(土)~6月17日(日)  
 企画展:『ゆかいなパロディ-木彫展』  
 6月26日(火)~7月1日(日)  
 第34回写真家協会展:『土佐』選抜移動展  
 7月14日(土)~9月9日(日)  
 夏休み企画展:『夏休み限定!デハラユキノリ博物館』  
 8月18日(土)  
 夏休み博物館教室〔工作〕  
 8月26日(日)  
 夏休み博物館教室〔化石〕  
 9月25日(火)~11月23日(金・祝)  
 開館15周年記念企画展:『第70回 野並允温 個展  
 - 平家の里風景画とヒマラヤの山 - 』  
 2013年1月3日(木)~3月3日(日)  
 企画展:『豊かな森にすまうもの - 高知のコウモリ - 』  
 3月16日(土)~4月14日(日)  
 春季企画展:『横倉山の植物写真展』(仮称)

〔博物館友の会「フォレストクラブ」の平成24年度活動予定〕

2012年5月3日(木・祝)  
 “土佐の投入堂” 聖神社とアケボノツツジ  
 観察会  
 5月21日(月) 金環日食観察会  
 5月26日(土) 友の会総会  
 6月2日(土) 仁淀川水質調べ  
 6月6日(水) 金星の日面通過観察会  
 6月9日(土) 大座礼山のブナ林観察会  
 7月4日(水) 杉原神社のヒメボタル観察会  
 8月13日(月) スターウォッチング  
 ~夏の天の川 こと座~  
 10月20日(土)~21日(日)  
 直島探訪と清盛ゆかりの地めぐり  
 11月17日(土) 市山・鬼石垣への道整備  
 2013年1月1日(火)  
 初日の出を横倉山で  
 スターウォッチング  
 ~冬の星座観察会 すばる~

## スタッフの声、声、声

〔山中〕 横倉山自然の森博物館は、平成9年に開館し15周年を迎えました。館長も私で7代目となりました。地元越知町はもとより、高知県内の小・中学校の遠足、総合学習や大人の生涯学習の場として、さまざまな社会教育活動の受け入れを行ってきました。

地方の博物館として、地元越知町や高知県関連、南海地震など時代に即したものの昆虫・恐竜などの様々なテーマで企画展を開催してきました。

今年の夏に行った『夏休み限定!デハラユキノリ博物館』では、これまでの企画展の中で最高の入館者数を記録しました。多様な教育的効果はもとより、子どもから大人まで、家族連れで館内が久し振りに大いに賑わいました。これからも高知県中山間地域における数少ない社会教育施設として、できるだけ多くの人々に親しまれ、利用していただける博物館として、活動・運営していきたいと思っていますので、町民の方々はもちろん町外の皆様様の温かいご支援のほどよろしくお願い致します。

〔前田〕 文化祭初日の11月3日には広島県旧芸北町八幡地区の神楽団「田尾組」の上演でオープニングを盛り上げていただきました。舞手、楽人(笛、太鼓など

を演奏する人)の迫力あるリズムに、時が経つにつれて観客も一緒に、調和して盛り上がりゆく感動。単調なリズムが波のように打ち寄せたり引いたりして、太古から続く歴史の重さを感じ、興奮した一時でした。このような伝統文化、伝統芸能、風習などはただ懐かしむだけでなく、自然や生活など自分を取り巻く環境を考え、未来のことを考える貴重な財産ではないでしょうか。わが町にも盆踊り、七夕祭り、おなばれ、虫送りなどの伝統行事が受け継がれています。この伝統を絶やすことなく、後世に伝えていきましょう。

〔安井〕 『天災は忘れられたる頃菜る』。高知県が生んだ偉大な地球物理学者・寺田寅彦の残した“名言”である。高知城北麓の高知市小津町にある「寺田寅彦先生邸址」(牧野富太郎著)の石碑の下に、この句を刻んだ小さな石のプレートがはめ込まれている。平成23年3月11日の「東北地方大震災」の津波による大被害以来、高知県でも南海地震による津波の心配が一気に浮上・深刻化してきた。過去の苦い、悲しい災害を風化させることなく、教訓とするためにこの言葉は常に心に留めておく必要がある。自然災害はどうすることもできないが、被害を少しでも軽減

することは可能である。そういった意味では寅彦の“名言”はこれからの人類に対する教訓であり“警告”でもあると言える。

〔小野〕 幻の果物と言われるボポーの実が生ったので食べてみました。最近ではテレビなどでも取り上げられているパンレイシ科の樹木で、収穫すると数日で果皮が黒く変色するので流通していないようです。肝心のお味はというと、バナナと柿を混ぜ合わせたような不思議な味でした。カスタードクリームのような食感でしたが、バナナがあまり好きではないため美味しいと思えなかったことが残念でした。

〔伊藤〕 10月下旬、庭いっぱい落ちた柿の葉をよくみると橙色や朱色に黄緑などの斑模様で色とりどりで綺麗なことに驚きました。毎年落ちているはずなのに今まで気づきませんでした。

〔片岡〕 10月より博物館に勤務し、はや1か月が過ぎました。慣れない仕事を若い先輩方に教わりつつ、日々過ごしております。気が付けば山の木々は色づきはじめ窓越しに眺めるメタセコイアは冬支度を始めています。周りが12月の準備をする中、私も置いて行かれないように頑張っていきます。宜しくお願いします。

高知県越知町立

**横倉山**  
 THE YOKOGURAYAMA  
 NATURAL FOREST  
 MUSEUM, Ochi  
**自然の森博物館**

〒781-1303 高知県高岡郡越知町越知丙737番地12  
 TEL0889 26 11060 FAX0889 26 10620  
<http://www.town.ochi.kochi.jp/>

開館時間: 午前9時より午後5時まで  
 最終入館は午後4時30分  
 休館日: 毎週月曜日(祝日の場合は翌日)  
 12月29日から翌年の1月3日まで  
 入館料: 大人.....500円 (各20名以上) 各20名以上は100円引き。  
 高校・大学生.....400円  
 小・中学生.....200円  
 越知への交通  
 高知——JR特急 約30分——佐川——バス 約15分——越知  
 JR普通 約50分

